

聖書日課 『からし種』 2025.2.9-2.16

<p>2月9日 (日)  ゼカリヤ 14章</p>	<p>「その日は、主にのみ知られている／そのときは昼もなければ、夜もなく／夕べになっても光がある」(7節)。「その日」は不思議な日。御心が天になるごとく地の上になり、夕べになっても光がある日。十字架の主の命の言はけって闇に飲み込まれることなく、私たちを照らす光。「主の日」は「その日」の成就を先取りしてみんなで祝い、礼拝をささげる日。ハレルヤ。</p>
<p>10日 (月)  マラキ 1章</p>	<p>「わたしはあなたたちを愛してきたと／主は言われる。しかし、あなたたちは言う／どのように愛を示してくださったのか、と」(2節)。旧約最後のマラキ書は「わたしはあなたたちを愛してきた」という主の言葉で始まる。創世記の初めから旧約聖書に通奏低音として響く主の愛の呼びかけは、新約の主イエスにつながり、今日を生きる私たちにも届けられている。</p>
<p>11日 (火)  マラキ 2章</p>	<p>「レビと結んだわが契約は命と平和のためであり／わたしはそれらを彼に与えた。それは畏れをもたらず契約であり／彼はわたしを畏れ、わが名のゆえにおののいた」(5節)。レビは礼拝奉仕者のこと。レビたちのさまざまな礼拝奉仕は、私たちの間に主に対する畏れをもたらず働き。私たちを命と平和の祝福に招く礼拝を心込めてささげていこう。</p>
<p>12日 (水)  マラキ 3章</p>	<p>「十分の一の献げ物をすべて倉に運び／わたしの家に食物があるようにせよ…必ず、わたしはあなたたちのために／天の窓を開き／祝福を限りなく注ぐであろう」(10節)。「十分の一の献げ物」は私たちにとって大きなチャレンジだ。しかし、わたしの人生を真の祝福に導いてくださるのは十字架と復活の主であることを信じる時、このチャレンジは喜びとなる。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.2.9-2.16

<p>13日 (木)</p> <p>マタイ 1章</p>	<p>「主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい』(20節)。ヨセフの「正しさ」(19節)ではマリアを迎え入れることができなかった。ヨセフには天使の励ましが必要だったのだ。神の愛は、私たちの「正しさ」では測ることができないスケールの大きな愛。でも今日も主は天使を送って、信仰の小さな私たちを励ましてくださる。</p>
<p>14日 (金)</p> <p>マタイ 2章</p>	<p>「東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた」(9-10節)。「星が先立って進み」とあるが、なぜ星はヘロデ王の宮殿に行く前に学者たちをまっすぐ幼子のところに導かなかつたかと不思議に思う。星はいつも学者たちの求め通りに動いたわけではなく、彼らに祈りと信仰を求めたのではないか。</p>
<p>15日 (土)</p> <p>マタイ 3章</p>	<p>「わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちにバプテスマをお授けになる」(11節)。主イエスが私たちに授ける「聖霊と火のバプテスマ」とは何を指しているのか。「キリストと共に死にキリストと共に生きるバプテスマ」。十字架と復活にあらわされた「聖霊」(救い)と「火」(裁き)の働きこそ、私たちを新たに生まれさせる恵み。</p>
<p>16日 (日)</p> <p>マタイ 4章</p>	<p>「こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った」(25節)。異邦人の地と呼ばれた場所、神の都エルサレム、エルサレム以外のユダヤ、『向こう側』と呼ばれた場所などから、人々が続々とイエスのもとにやってくる。ともに癒やされる。その流れは「平和が川のように」というあの歌を思わせる。</p>